

発表タイトル	会話分析—「言葉探し」による修復の構造—
発表者所属名	比較文化学専攻（国立民族学博物館）
発表者氏名	中田梓音

発表の概要

一見無秩序に見える会話には、1つの順番において1人が話し、話し手の交代が繰り返されるという基本的な構造がある。会話分析は会話の構造の中にあられる現象を、その場の文脈に即しつつその文脈を超えて一般化することが可能であるような説明を目指すものである。本発表は、会話におけるトラブルを処理するメカニズム、「修復の組織」に着目した会話分析セミナーの受講後に、オリジナルのデータを用いて再分析したものである。

「言葉探し」は「修復」か

修復には「トラブル源」「修復の開始」「修復そのもの」があり、その課程が、会話者に「修復すべきもの」がどれかを示す。修復の操作の形式には「やり直し」、「挿入」、「置き換え」、「言葉探し」、などがあるが、他の形式に比べて「言葉探し」には明らかなトラブル源がなく、「修復」と言えるのかどうかはまだ議論の余地がある。以下に、ある飲食店での男女の会話の中から「言葉探し」と思われる箇所を用いて考察する。

018K： であの：(0.3) なんやっただけ (h)，あの：(1.8) (あの) ちくわみたいな (h) あの＝

019A： ＝あ：：きりたんぼ？＝

020K： ＝>きりた (h) んぼ (h) じゃ (h) ない [(h) <.

021A： [え？

022K： ¥きりたんぼはあれやん¥， >北陸のほら(h)<，＝

023K： ＝.h あの：なんやっただか [な.

024A： [ちくわ？はんぺ [ん？

025K： [はーはんぺーはんぺんじゃなくて

(中略)

033K： [えなんやっただかな (1.6) まあなんかそんなんあんのよ.

考察

結果的には K が言葉探しを放棄することにより失敗に終わっているが、修復の開始の位置は 18K で、沈黙（音の途切れ）や音の引き延ばし、「あの一」などの言いよどみによってスムーズな会話の前進が明らかに止まっている。受け手（A）に、なんらかのトラブルがあったことを喚起し、相手にも言葉探しの援助を要請して、お互いに言葉が思い出せないトラブルを解決しようとしていることから、明らかなトラブル源の有無、結果の成功失敗にかかわらず、「言葉探し」は「修復」であると考えられる。